

探究が高度化し自律的に行われるよう戦略的に考え行動する：

「総合的な探究の時間」のカリキュラム・マネジメントを通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 「教師教育研究」編集委員会 公開日: 2024-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 幸郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000239

探究が高度化し自律的に行われるよう戦略的に考え行動する

「総合的な探究の時間」のカリキュラム・マネジメントを通して

水野 幸郎

I. はじめに

「むかしから二人組をつくるのが苦手だった」

2023年の秋ドラマ、「いちばんすきな花」の冒頭の主人公のセリフである。ペア学習のとき、教師が「好きなお友達同士で二人組を作ってください」と促す。次々ペアが決まっていく中で、一人取り残される小学生の主人公。現在の場面、「学校は友達を作り人間関係を学ぶところ」だから自分は子どもたちに教えられないと思って教師ではなく塾の講師になったと語る。大人になってもうまく二人組が作れないことで嫌な思いをすると話をしながら「ああ、だから学校でそれやるのか」と独り言ちる。

「大人の男女の間に友情は成立するのか？」がテーマ。学校での不登校、いじめ、家庭内暴力が挿入されている。主人公はいじめについての相談を受け、「学校の先生は対処してくれるか」の問いに、先生個人によってうまく対処してくれたり、そうでなかったりすると回答する。

一般の学校へのイメージはまだ変わっていないように思われる。

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（令和3年1月）の中で、「日本型学校教育」の成果や強みについて、「学校が学習指導のみならず、生徒指導等の面でも主要な役割を担い、様々な場面を通じて、子供たちの状況を総合的に把握して教師が指導を行うことで、子供たちの知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国から高く評価されている」としている。新学習指導

要領は更に進めて「個別最適な学びと、協働的な学び」を実現することで、一人ひとりの生徒が在り方生き方を考えながら、それぞれの尊厳が守られながら学べるように改訂された。すべての学校で新たな学びに向けて取り組んでいるところである。

東京学芸大学先端教育推進課が企画した「個別最適な学びに関する公開シンポジウム（第1回）」にオンラインで参加した。上智大学 奈須正裕教授の講演などを拝聴した。その中で「個別最適な学び」について、単元など内容のまとまりごとに授業をデザインすることが重要で、上手な図工の授業で説明したことが印象に残っている。たとえば、版画の授業について、上手な版画や版木などを図工室に十分用意する。彫刻刀の使い方を徹底的に指導し、目標を説明したらあとは子どもたちのペースに合わせて活動させる。友達と相談したりペースを調整したりするのは子どもたちに一任するというもの。「総合的な探究の時間」をデザインするときのイメージがわいた。

探究コーディネーターとして訪問している高校で戦略的に考え、行動している取組みについて報告し、その意味を考察する。

II 丸岡高校：指導と評価を一体化する取組み

- 1 探究の意義や価値を探究する
- 2 内容のまとまりを意識して指導と評価を考える

III 勝山高校：共有ビジョンで焦点化する取組み

- 1 中間発表にラウンドテーブルを取り入れる
- 2 勝山高校で育成する資質・能力を明確にする

IV 戦略的に考え、行動する

- 1 戦略的に考え、行動する必要に迫られている
- 2 戦略的に考える
- 3 戦略の構造のもと深い学習サイクルを広める

Ⅱ. 丸岡高校:指導と評価を一体化する取組み

1. 探究の意義や価値を探究する

1) ラウンドテーブルで対話しながら探究する

『探究って何のためにやるのか』を探究しましょう。」
2023年7月13日13時ころ、丸岡高校体育館にてラウンドテーブルの冒頭、46のグループに分かれた全校生徒と教職員に向けて吉田教諭が提起した。

「正解があるわけでもなく答えが見つかるかどうかもわからないがグループのメンバーで対話しながら探究し、まとまったら「えんたくん」(直径90cmくらいの段ボールの上に、同じ大きさの紙を敷いたもの)の中央に書いてください」と指示した。対話を始める前に、生徒会長に答えてもらおうと「結構難しい質問だと思ったんですけど、私が探究するのは自分の「知りたい」を見つけるための探究みたい。探究しても答えが見つからないかもしれないんですけど。何のために探究するのかという自分が解決したい課題に向かって行動していったり、これを知れば解決できるかもとか考えたりすると、あれ知りたいこれ知りたいと探究心が沸いて探究している」としどろもどろになりながら誠実に答えた。拍手が沸き起こった。後から聞くと、とっさにアドリブで答えたとのこと。

水野を含め6人(1年生2人、2年生2人、3年生1人)がグループを組み、体育館の後ろの方で蒸し暑さを我慢しながら「えんたくん」を囲んで座り、静かに聴いていた。

最上級だからとファシリテーターを務めている3年生が「自分の考えを書いてみよう」とみんなを促した。しかし、みな一向に手が動かない。実際、昨年度末に放課後、教室に残っていた他校の3年生4人に同じような質問をしたことがあった。しばらく考えて、「推薦入試やAO入試で「総合的な探究の時間」で活動したことが役に立っただけ、何でやるのかよくわからなかった」という感想しか出てこなかった。1年生は高校に入ってきたばかりで何も出てこないのではないかと思っていた。

かなりの時間が過ぎた頃、おもむろにペンを取り書き始めた。1年生2人は「探究とは常に新しいことに挑戦すること」「自分が気になっていることを調べて解決する」と書いた。2年生2人は「困りごとを見つけること、視野を広げること」「テーマにあったグラフや表を見つけること、自分の好きなことで他の人の役に立つこと」と書いた。3年生は「協力して解決案に向かって活動すること、自分で考える」と書いた。3年生が一人ひとりに発言を求めた。書いたものを読み上げるだけだったが、一通り意見が出

そろった。3年生はグループの考えとしてまとめに入るが、どうしようとみんなに助けを求めると、進まない。

水野が介入することに関してはできる限り控えた方が望ましいのは分かっていたが、思ったよりの射た考えが並んでいてうれしくなり、ついアンダーラインを引いて「キーワードになりそうなことばが出て来たね」といつてしまった。これらをまとめるよう3年生を励ますと、「自分の好きなこと、気になったことを視野を広げ、自分で考え挑戦する」とまとめた。

2年生が「他の人の役に立つこと」と社会に貢献することに気が付いていることを見落としている。また、もう一人の2年生の「困りごとを見つけること」は後に課題設定の一つの視点として生徒に語ることになった。最初の課題は身近なものを考えることで検証しやすくなるが「困りごと」は課題の候補にふさわしいもののひとつになることがわかった。新しい視点を頂いたような気がする。

探究活動をする意義や目的について、それぞれの期間活動してきて、自分なりのことばで表現できることは評価に値する。丸岡高校の取組みの成果であると考え。

2) 全体で共有し、探究を深める

令和5年度、丸岡高校「総合的な探究の時間」発表会は7月13日(木)9時45分から第一部が始まった。前日、福井県は集中豪雨に見舞われ、休校になった学校もあるような状況の中で進められた。全校生徒、教職員、校外参加者に加えて丸岡中学校の3年生を招待した体育館は蒸し風呂状態であった。

第一部(9:45~10:35)、第二部(10:45~11:35)、第三部(11:45~12:35)の三部構成で全員のポスター発表が行われた。昼食をはさみ、ラウンドテーブル(13:15~14:05)が行われた。

昼食直後でもあり、蒸し暑さも増していたが、46のグループに分かれた生徒や参加者は「えんたくん」を囲んで静かに開始を待っていた。吉田教諭の進行で、まず自己紹介。名前と「自分を喩えるすしの絵」を書くことから始め、3年生のファシリテーターに促されて1年生から順番に話し始めた。それぞれ器用に絵をかき、なぜそれを選んだのかを説明した。喩えるのは難しかったようで好きなすしネタを描いたと話していた。

一つ目のテーマ「探究をしていて大変だったこと」を発表し合った。二つ目のテーマが「探究って何のためにやるのか」を探究することであった。各グループで話し合った後、全体で共有することになった。いくつかのグループが手を挙げて発表し、探究を深めていった。

何日か経った後、すべての「えんたくん」を調べたところ、次のようなまとめが書かれていた。

「将来のため」

「自立するため」

「自分を知るため」

「自分を探す、自分を知ること」

「新しい自分を見つけるため」

「自分の人生をよりよくするため」

探究をしながら自己の在り方や生き方を考える機会になったのではないと思われる。

「自分で考えて行動する」

「自分の力で調べていくことに意味がある、人との関わりを学ぶ」

「自分らしく豊かに生きるために自分で答えを探し自分から行動する力をつけるため」

「探究とは答えのない1つの問いから新たな課題を見つけ、それを繰り返すこと」

「自分の可能性を知り将来に向けて考える能力を鍛え、身近なことを見つけていく」

「他人と自分が不思議だと思ったことを共有して自分が成長すること」

「社会で活躍する力と自分で考えて行動する力をつけるため」

「自分が好きなことを見つけそれによって周りとながら知識を増やし自分の視野を広げる行動力をつけるため」

自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えている。取り組んだ探究活動を通して、自分の考えや意見を深め、また、学習の有用性を実感するなどして探究することの意味を自覚していると考えられる。

「自分の将来への興味を深め社会に出て疑問を持った時、自分だけで解決するのではなく、周りの人と協力して解決する大切さを学んだり、疑問を持たないより少しの疑問でも持って行動したりしたほうが良い仕事ができる」

「自分の興味あることを追究して将来に活かす」

「自分の視野を広げるため、街に何が足りないかを調べ社会に貢献するため」

人や社会とのかかわりにおいて、自らの生活や行動について考え、社会の一員として、人間として何をすべきか、どのようにすべきか考えている。

高等学校学習指導要領において総合的な探究の時間の目標について「第1 目標」(以下「第1の目標」)の中で、「(1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探

究の意義や価値を理解するようにする。」と探究の意義や価値を理解することを目指している。

「解説」の中で「探究の意義や価値を理解するということは、探究はよいものだというようなことを生徒が観念的に説明できるようになることを目指すものではない。総合的な探究の時間だけではなく、様々な場面で生徒自らが探究を自律的に進めるようになることが、その意義や価値を理解した証となる。」(p 14)と説明している。

しかし、総合的な探究の時間や「みらい」の時間などで取り組んだ学習活動を通して、自己の経験を積むことにより、探究について知らず知らずのうちに考え続けたことで言語化することができたと考える。単に、観念的に語るだけ以上のものが身に付いたと考えられる。1年生にとっては、探究の意義や価値を考えた体験が、これからの活動においてもその意味を考えながら活動するきっかけになりうると思う。

3) 探究の意義や価値を意識しながら探究に取り組む

生徒や教職員の中に探究についての深い理解や精神が根付いているのにはわけがある。現在のような探究活動にいたる歴史がある。

令和4年度、普通科に「みらいの人材を育てるコース」が2コース誕生した。「みらい共創コース」と「スポーツ探究コース」である。文部科学省研究指定「学校改革推進事業グローバル型」の取り組みを発展させたカリキュラムを持つコースであり、学校設定教科「みらい」を通して生徒全員が様々なことに全力で取り組み、いろいろな経験をする中で、自分の可能性や変化を発見していくことがデザインされた。

これに先立ち、地域探究活動と総合的な学習の時間をリンクさせるカリキュラムが創出され、探究活動を核とした学校運営、カリキュラム・マネジメントが続けられてきた。

その中心となったのが現在探究推進リーダーとして活躍している小林教諭である。

丸岡高校は、平成30年度から福井県教育総合研究所の「課題解決型モデル開発事業」に協働で取り組んできた。高等学校での新学習指導要領の完全実施を前に、福井県は先行実施を1年先行する形で県内の6校で始めた。

この事業は、東日本大震災と、それを契機にして行われたOECD 東北スクール・プロジェクトに端を発している。震災で被災した、福島・宮城・岩手の3県から100人の中高生が参加し、『新しい東北・日本の未来』を考え、東北地方の経済活性化に必要な産業やイノベーションを生

み出すための人材育成を目指して行われた。それぞれの学校の実情に合わせて、総合的な学習の時間などを利用して、プロジェクト型学習の手法を用いて行われた。生徒自身が考えたり、新しい人的ネットワークを構築したりして、教員や地域と協働して取り組んだ。

「子どもたちと教師が共同で、2030年の世界における課題に対応していくためにはどのような知識やスキル、ふるまいが必要かということについて考え、自分たちなりの『2030年に向けた新しい学校教育』のモデルを創り出した」(OECD, 2015) とされた。

文部科学省は、東北スクール・プロジェクトの後身として「地方創生イノベーションスクール」、これらのコンピテンシーを育成するためのプロジェクト型学習を全国の高校に広め深化させる教育プロジェクトをスタートさせた。福井県教育委員会が主導して、いくつかの高校が福井クラスターとして参加したのが「課題解決型モデル開発事業」である。その精神が引き継がれて、現在の「総合的な探究の時間」などに活かされている。

したがって、探究活動は手段であり、その意義や価値を意識しながら本来の求める資質・能力を獲得することを生徒も教員も求めている。そのことを今回のラウンドテーブルは示していたと考えられる。

2. 内容のまとまりを意識して指導と評価を考える

1) 評価基準を目標に実践する

「総合的な探究の時間」発表会の第一部は各ブースに多くの聴衆が集まって開始された。1年生の発表を見るために生徒たちの後ろで参観した。まず、ポスターにグラフや表があるか確かめる。課題を設定する動機などのあとに探究の方法や仮説などを述べるときグラフや表を根拠にして話しているか注意深く見守った。

丸岡高校は校訓として「Think globally, act locally to make your dreams come true (身の回りの事象や地域の課題をグローバルな視点で捉えて行動し、自己実現を達成する)」を掲げている。その実現を目指して学校教育目標「地元への誇りや愛着を涵養し、地域や社会と関わりながら主体的に行動し、自己肯定感・自己有用感の高い生徒を育成する。」ために具体的に、「総合的な探究の時間」、学校設定教科「みらい」等を通し、地域と連携したグローバルな探究の学びを推進」するとしている。

そこで1年生の最初の目標として「自分の意見を客観的な根拠(データや資料)をもとに伝える力」を育てることと分かりやすく示し、何をすればよいのか、評価の観点

を明確にすることで生徒と共有している。

[知識・技能]

テンプレート通り(それ以上)の発表資料を作成できる

[思考・判断・表現]

自分の意見の根拠となるグラフ・表が2つ以上ある

[主体的に学習に取り組む態度]

企業や施設に訪問してインタビューをした

地域の方などにアンケート調査をした

実証するために自分や友人の力を借りて検証結果をデータにした

フィールドワーク(現場に行き調査した)

事前に生徒に目標や評価基準を共有していることを認識していたので、冒頭のような聴き方ができた。生徒によって到達度はまちまちであったが自分なりに精一杯根拠をもとに話そうとしている姿勢が見られた。

2) 自分で学びを調整する

1年生に配付された「CF(総合的な探究の時間)評価と中間発表会に向けて」には目標や評価基準だけでなく、学習内容や発表会の内容、時間数、テンプレート(枠組み)などが記載されている。

生徒は総合的な探究の時間に手元において学習の進度を調整する。1時間ごとにどこまで進んだか決めるのではなく、内容のまとまりで考えることにより、課題設定の段階で担当教諭のゴーサインが出ないと焦ってはいるが、他の生徒と比較するのではなく自分の進度を考えて急ごうとしていた。最終的には、ポスター作製の時間で調整し発表会には間に合わせていた。

また、担当している方でも何を評価するかが明確なので生徒と対話する中で外部へのアンケートや訪問することを提案することもできる。中間発表会のあとではあるが、屋根付きの公園を市役所に提案するという課題を考えている生徒と対話している場面に遭遇した。市役所で実際に計画しているらしいということで市役所に行き質問をぶつけることを示唆したという話を聞いた。生徒を指導・支援することで主体的に学習に取り組む態度を身に付けさせることも可能になる。評価する段階でもその話し合いが教師側の判断に役立つと考える。

3) 指導と評価の一体化を図る

今回の学習指導要領の改訂にあたり、学習評価の意義が強調され、その充実が求められている。総合的な探究の時間に関しては、国立教育政策研究所が提供する「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料

総合的な探究の時間」において次のように示されている。

「学習評価の充実に当たっては、いわゆる評価のための評価に終わることのないよう指導と評価の一体化を図り、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視し、生徒が自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように評価を行うことが大切である。」

「指導と評価の一体化を図るためには、生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくことが大切である。すなわち、平成30年に改訂された高等学校学習指導要領で重視している「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っている。」と指導と評価の一体化の重要性を述べている。

総合的な探究の時間の「内容のまとめ」ごとに評価することにより「主体的・対話的で深い学び」を充実させることを目指している。「本参考資料第1編第2章の1(2)」では、「内容のまとめ」について、「学習指導要領に示す各教科等の『第2款 各科目』における各科目の『1 目標』及び『2 内容』の項目等をそのまとめごとに細分化したり整理したりしたもので、『内容のまとめ』ごとに育成を目指す資質・能力が示されている」と説明されている。

したがって、総合的な探究の時間における「内容のまとめ」とは、全体計画に示した「目標を実現するにふさわしい探究課題」のうち、一つ一つの探究課題とその探究課題に応じて定めた具体的な資質・能力と考えることができる。」と示されている。

今回の探究活動においては「自分の意見を客観的な根拠(データや資料)をもとに伝える力を育てる」ことが丸岡高校の「目標を実現するにふさわしい探究課題」であり、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の観点別に示されたものが資質・能力と考えることができる。総合的な探究の時間を定期的に参観して、先生方の努力により評価を意識した指導が達成されたように思われる。生徒たちにふさわしい選択であったかどうか振り返り、次年度以降のカリキュラムに反映することが期待される。

3. 探究の指導などについて振り返る

12月6日(水)に小林教諭、吉田教諭、水野の3人で今年度のここまでの探究活動を振り返りました。

1) 探究の文化を醸成する

水野: 探究することの意義や価値を意識しながら子どもたちが取り組むことが大事だと思います。(ラウンドテーブルでグループごとのまとめとして) いろいろな文章の中に出てきたと思うのです。吉田先生自身が聞いたときにああいう答えが出てくることは予想されていたのでしょうか?

吉田: 想定外みたいなことは出てきた、想定以上のものが出てきたと思うのですが、探究するときに小林さんともよく言うのですが、人に当てる(聞いてもらう)ことで頭が整理されるっていうか。誰か聞いてくれるとすごく嬉しいっていうのはあるなかで、この学びを、なんでこれをやっているっていう、それがまさしく粘り強さだったり、キャリア教育だったり、情報収集することだったりっていうのを人にぶつけていくうちに、探究ってこういう意味があったんだっていうのを、人に喋ってないとなんやこれと思うかもしれないですけど、人にぶつけて、あるいは人の意見を聞きながら特にアウトプットとすることで自分の話が整理されてくるという意味では、逆に僕そんなに書かれてなくても喋りさえすればいいと思うんですけど。書くときと視覚化されるのでもっともっていいっていう中で、僕の認識の中では思ったより書けたなっていう、そんな印象でした。それは教師が想定、求めている答えを書いてくれただけっていうところも多分にあるのでしょうか、それにしたって自分の口で言っているわけだから、そういうことかと多分思ってくれたと思ってすごく良かったし、次は小林先生がうまくやってくれるでしょう。

小林: それはまあ自信ないですけど、この1回目はすごく良くて、また今度2回目して来年してって、どんどんやっていくと、どんどんそれが生徒に染み込んできて、3年生、2年生から今度1年生に何か伝えることができるようになってくると、自然と僕らが探究大事だよって言わなくても自然と学校の雰囲気として浸透してくるといいなって、そこまで僕がこの学校に入れるかわからないですけど、でもそうなってくるとすごくいいなと。

2) PBLでしかできないことを生徒に届ける

水野: 文部科学省が言っているように、探究の時間などの場合には内容のまとめで考えなさいと。その中でまず目標を明確に定めて、そのための資質・能力はこんなことを身につけるんですよって子どもたちに提示しながら始めるといいんじゃないかと。授業の最初に今日はこういうことをするんですよって話をして、1時間でこれだけできましたかということ振り返るといような授業

が多い。そうじゃなくて、例えば10時間なら10時間でこれだけしますよって言って、その途中は子どもたちの自由というか、自分でペースを決めて学習するっていう。今回の場合(1年生の中間発表)で言うと根拠を持って説明するという力をつけるために、自分がどういうことをすればいいかを自分で調整しながらやっていけるようなカリキュラムにしているというふうに僕は見ているのですが、そういうことがすごく大事だと思うのです。その中で僕自身として見えてないのは、さっき言ったみたいに、途中で子どもたちが(スキルや情報などを)欲しいって思ったときに何を見るのかって言ったときに、さっき言われていた、何だっけ「探究ナビ」だっけ。

小林:「探究ナビ」もそうだし、僕らは「みらい」でいろんな講座をやったりして、生徒自身も自分が興味のある講座を外で学んでいたりするんですけど、やっぱりそのときに学び方っていういろいろあって、ワークショップ形式の学び方とかもいろいろあったりして、そういうところでいろいろこれ使えるかなと思うことを、生徒が各々取り入れてってもらえるといいかなと思ってやっているんで、だからスキルをどんって導入する必要はないかなって思う。生徒が各々勉強していけばいいかなみたいなのもあって。いろんな活動に参加してたりするんで、その経験とかが探究にも活かされてくるんじゃないかなって思っています。

水野: 吉田先生としては他に何か用意してたりするものはあるんですか?

吉田: 何か探究って自分もワークショップでいろいろ経験しているので、迷ったら俺に聞けっていうタイプなので、他のものが邪魔ではないんで、これはキャラクターによると思うんですよ。僕、勝山とかに行くと、言っちゃうんですよ。本当は、見守ってあげるとかね、いろんな先生のタイプがいると思うんですけど、僕性格上言っちゃうんですよ。こういったものがあったらいいとかって、じゃあ作りなさいって言って、こういう風に作りなさいとか僕言っちゃうんですけど。例えば「うーん」ってなった時にじゃあ街に出て、例えば今ペイペイとかで、ペイペイと現金だったらどっちがいいっていったら、スーパーに行って使っている人にインタビューするなり、時間計測して計ってこいって僕言ってしまうんで。彼は僕に近いとは言え、そこまで言わないと思うんですけど僕、言っちゃうんですよ。

小林: でもやっぱり1年生とか最初はそういうのも僕も必要なかなと思っていて。探究ってあんまり教えないとかって言うんですけど、それは多分、最終段階3年生

だったらそれは必要ないと思うんですけど、最初の段階はそういうのもあっていいのかなと思っていて。なんか「守破離」の守が1年生のイメージで、破、離って最後離れてってもらえるといいかなと思っていて、最初から何もアドバイスしないとかっていうのは、ちょっと探究は微妙なのかな、とは確かに思う。やっぱり手をかけてあげないとそれがわからない子もいると思う。

水野: それはもう一番大事なところなのだろうと思うんですけど、タブレットの力っていうのは大きいのかなとは思いますが、その辺はどうなんでしょう?

吉田: どうなんですかね、わからない。難しいと思うのが、僕が20年以上前に好きなテーマを持って自分で発表して、その授業でわからなかったら質問してっていうことをやっていたんですね。だから25年くらい前に、今思うとあれは僕の中の探究の理想形なんですけど、インターネットがなかった時代なんですけど、雑誌とか新聞でもこいつらすごいなあってくらいびっしり調べてくれて、それをきれいに一枚にまとめて授業をするっていう。一枚のプリントにまとめて授業するっていうタイプがあったので、それ以前も知っている人間とすると、あの子たちはタブレットに頼りすぎてしまうところがちょっと強いので、僕はこれが実は正しいのかっていうと、それがなかった時も僕知っているんでそれがなかった時だってできるから。例えばアンケートを取るっていった時にすごくアンケートってああいうの(タブレット)はすごく便利だなと思いますね。グラフも出るし即座に取れるし、じゃあ、情報収集の力としてタブレットはすごく便利かっていうと、ちょっと僕、そこは懐疑的なところがあって、あれ以前にあの子らあんなにできたよねって。例えばラグビー部の子が室伏の投擲の角度っていうのはなぜ理想的なのかとか。柔道の締め技で最も理想的な締め方は何かとか。街のことについて調べる子もいたんですけど。あのイメージでいて、タブレットが来たのですごく便利だなと思ったらタブレット中毒みたいになっている子たちがいると、これって一回タブレット見ずにやれて、どうしても言いたくなっちゃうんですけど。見ないとできませんというけれど。できないって、先生できている例あったかなって思うんですけどね。図書館に行ったり、新聞山ほど持ってきたりとかやっていた。あれはあれで僕好きだったので、切り抜きとかでやりながらやれていた子たちが全員それでやれていたんで、便利かなって言われるとどうなんですかって便利なんですかって。タブレットがなかった時期はどうやっていたんですかって。

小林: タブレットがなかった時期はほら、パソコン室が

パンクしていた時期で、もうアンケートとかも学年みんなまで外に出て取りに行きましたね。

吉田：ああ、行った、行った。一緒に行った。

小林：アンケートを取りに行きました。地域の方に声をかけてアンケートに協力してもらって、みんなでそれ持ち寄って集計して、100人ぐらい回答してもらった。

吉田：あの時ってほら、総合の時間ってパソコン室がみんな交代交代で、僕も鯖江の時にやったのが、探究の時間は例えば木曜日の7時間目だけど、時間割り変更することで1, 2, 3, 4って振り分けられる。僕時間割りの係だったからそういうのをやっていた。勝山さんに聞いてもローテで入る、丸岡さんもパソコン室がパンクしてどうやって組み替えるか大変って聞いていた。それはそれできないことはなくて、その子たちはずっとそんなパソコンにしがみついてないとかできないかって言うと、そういうわけでもないけど、パソコンを見る時間でわっと調べて、それから外出したりとか、自分らでやったりとか。けど、今見ているとみんな1日ずっとパソコン見ているから。便利な側面とそうじゃない側面があるってことは、教師はちょっと理解した方がいいのかも。

小林：やっぱパソコンとか検索して書かれている内容って、うまくみんながわかりやすいように書く分、ちょっと深くないっていうか、浅い感じでうまくまとめられちゃっているんですけど、先生(水野)がおっしゃった新書とか見た方がもっとわかりにくい文章にはなるかもしれないですけど、深くまで突っ込んでいるんで、そこを本当は見られると、より探究も進みやすくなるっていうか、ほわわとしてるところを見ると、探究もぼやけちゃうかなって。焦点化した新書とか詳しいのを見ていくことでここだなんていうのを見つけた方が。

吉田：丸写しになっちゃうところはやっぱ怖いよね、タブレットは。僕が鯖江にいたり、アドバイザーでこの学校に来たりした時に若狭だけ潤沢にタブレット使っていて、他の学校はパソコン室がパンクしてっていう。どうやって時間割を変更するっていう時から、コロナになって、みんなタブレットになって。じゃあタブレットが絶対かっていうとうーんと思うところは僕の中にはあります。そうじゃなくて成立していた時期や、パソコンそのものがなくて成立していたあれだけ素敵な発表ができて、あれだけ生き生きと新聞見ながらやれていたから。絶対かっていうと絶対かなっていう気がしますけど、もちろん便利なのは便利なんでしょうけど。これがないと進まないよねっていうのは話が別な気がしますけど。外に出てあのアンケートって僕も行っただんですけど、なかなか破

壊力があって、いきなりいろんな人に聞いていたから。

水野：その辺の指導を吉田先生とかどういうふうにされているのかなってというのは気になると思うけど。

吉田：言った通り、ちょっと外に出てみなさいって言うていた。こういう風な何していいかわからないって言うから、こういう風なのを一回ちょっと外に出したいので、こんなことやっておいでよって言うていうことは言うて、なるべく外に出すようにはしています。あとは直接言いますよね、タブレットの中が全てだと思うので学年集会でもいいですし、今日も言ってきたんですけど、学年集会で。

水野：使える部分と使えない部分とかが子どもたちにも分かるかと思うんですか？

吉田：今一周目なので、一周目のところは当然頼っていて。それが終わってからは「守破離」だと思うので。まず人前で発表するときには守の部分は大切にしないといけないし。

水野：そうすると今の1年生ってというのは探究を始めたのが4月とか5月ぐらいから始めたんですか？

吉田：最初からやりました。一番最初から。小林さんとどうするって話をしたときに、僕が好きなのはPBLのやり方、やれて言う。何をどうしていいかわからないってところで突っ込んでいった方がいいかなって言う。3月の最初この学校に来たときそんな話をしたかな。

水野：普通の学校が探究の基礎みたいなのをやっている時期に第一周目をやってしまって、二周目、三周目っていくって言う。結局その一周目って言うのは探究って何かなって考えるような時期の一周目って言うふうに見えるんですよね。

吉田：やりながらまさしくこのテーマちょっと違うなとか。このアンケートを取ってもちょっといかなんとか。それは手法で学ぶことよりは、つまずかせてあげた方がいいなど。だから、僕が言った通りポスターにはつまずいたことをちゃんと書きなよって言う。それが学びであって、教師にしてみるとそっちの方がよほど重要だと思う。

3) 目標を明確にして戦略的に推進している

丸岡高校の「総合的な探究の時間」を中心とした「主体的・対話的な深い学び」の実現に向けた授業改善が戦略的に推進されていることが振り返りをすることで確認できたように思う。基本的な目的は何で、どこに照準を合わせるべきか二人の話を聞いて明確になった。二人が対話しながら授業を見直している様子も垣間見えた。

Ⅲ. 勝山高校:共有ビジョンで焦点化する取組み

1. 中間発表にラウンドテーブルを取り入れる

1) ラウンドテーブルで課題設定について語り合う

2023年10月31日に実施された。1,2年生全員が教室や探究室に分かれて、5,6人のグループに分かれてテーブルを囲んだ。

ファシリテーターの対面の席が空いていたので、静かに座った。クラスや名前に加えて、「実は私〇〇なんです」と自分の特徴を3つ、自己紹介していた。メンバーが真剣に聞き入っていたのは、その中に「二つの真実と一つの嘘」が含まれていて、嘘を見抜くためだった。お互いがどういう人なのかと見た目から想像しながら聞くことで関心が高まり、当たりはずれで歓声や笑いが起こった。お互いに率直に話し合える安心・安全な場が少しずつ調ってきた。

まず、1年生が促され、「やせるためにはどうしたらよいか探究したい」と課題設定について今までの状況を語り始めた。テーマとしてはありふれたものであるが、本人としては自分の体型を気にして真剣に取り組もうとしていることが伝わってきた。ファシリテーターが「これまでダイエットをした経験は。経験があるのならば具体的に話してみて。」と探りを入れる。食事を減らすことなど何度か試したが、リバウンドして元に戻る繰り返したととつとつと語った。

ファシリテーターはメンバーに「何かアドバイスを考えて。まず、模造紙に書いてみて。」とテーブルの中心に置かれた模造紙を指して、しばらく時間を取った。その後、自由に話をさせ、食事を考える、お菓子をやめる、有酸素運動をするなどいくつかのアイデアについて話し合った。「いくつかアイデアが出たが、一つに絞って、深く探究してみて。」と結んだ。

突然、「先生、何か意見を聞かせていただけませんか。」と振ってきた。ゲストとして座っていたわけでもないのに、戸惑ってしまった。「テーマをどれにするにしても、自分でやってみてきちんとデータを取り、自分に合うダイエット方法を検証するとよいのでは。」と返した。ありふれたテーマの場合、先行研究もあるであろうし、結果がすでに明らかにされている場合もあるであろう。しかし、本人にとって何が最適であるか身をもって検証することにより、自分にとって最良のダイエット方法を見つけ出すのも探究であると考えたからである。

一人目が終了した。全員で何かアドバイスをすることで1年生の助けになりたいという意識が感じられた。

2) 課題設定について語ることで探究を深める

勝山高校のホームページに「勝山高校の探究」として自分を考える 自分で考える
いろいろなものに触れる
自分の言葉で話す 皆で話す

と3つの項目で取組みを説明している。3つ目の項目で「年に2回、自分の探究の状況を皆で話し合うラウンドテーブルを行います。大学の先生方や地域の企業の方、将来的には保護者の方々にも参加いただいて、語り合う、聴き合う場を設定します。話すことで自分の考えをまとめ、聴き合うことで自分自身の振り返りにもつなげます。勝山高校の探究の目玉のひとつです。」と対話的な学びについて、「どのように学ぶか」具体的に説明しています。

中間発表会などをラウンドテーブルの形式で実施しているところに特徴が表れている。多くの高校では、ポスター発表やスライド発表の形式で実施している。

ポスター発表とは、発表の内容を1枚の模造紙などの紙にまとめ、それをパネルや壁などに貼り、発表者はその前に立って、質問者が来るたびに答える発表形式である。その特徴は、1対1で質問者とやり取りができる。したがって、一度に大勢に説明することは難しいが、質問者と深い意見交換ができる。限られたスペースの中に必要な情報を入れ込む必要がある。

高校で行う場合は、時間を区切り、参加者をポスターの周りに集め、かなりの人数に向けて発表することが多い。プレゼンテーションの能力も発揮しつつ、その後の質疑応答で意見や感想をもらい、瞬時に回答を考えることで新しく発想できることもある。また、付箋などを利用して多くの意見や感想を得ることができる。この場合、聞き手から質問が出ず、質疑がうまく進まなかったり、付箋が集まらなかったりして探究が深まらない事がある。1対1の個別形式の良さが消される場合もある。

スライド発表とは、パワーポイントなどで作ったスライドを用いる発表形式である。内容の要約や図をまとめたスライドを作成し、スクリーンやモニターに映し出し、聞き手に向かって発表する。その特徴は、大勢に向けて一度に発表できる。発表の時間が決まっており、発表が終わった後で、質疑応答の時間をとる。アドバイザーを招いている場合は、専門的な見地からのアドバイスを得ることで、その後の探究の参考にしたり、方向転換に寄与したりすることもある。

この場合、直接的なアドバイスにより聞き手に回ってしまうことがある。また、深く話し合うことができず思考

が深まらない場合も出てくる。

いずれの場合でも、長所もあり短所もあるが、提案者がいろいろ考えることができることを一番に考えるとき、ラウンドテーブルという方法を選択することもありうる。

探究の課題設定の時にいろいろな生徒と対話することで「話すことで自分の考えをまとめ、聴き合うことで自分自身の振り返りにもつなげます」（3つ目の項目、説明）を実践し、課題設定の参考にしていたように思う。

3) すべての生徒がファシリテイトを理解する

ラウンドテーブルにより探究を深めるためには、メンバーそれぞれがファシリテーターの素養を有していることが必要だと考える。

今回参加したグループでは、ファシリテーターがうまく進行することができていた。

まず、チェックインでメンバーがどのような状態でここにいるのか、お互いに少しでもわかることで、安心して話しやすい雰囲気を作っていた。1年生が話し終えた後も、適切な「問い」で課題設定の背景を聞き出したり、他の生徒の意見を深めたりしていた。

ファシリテーターに協力しようとしているメンバーの様子から、それぞれがファシリテーターの経験があるのだろうと推測された。話し合いがスムーズに流れるように協力し、お互いの意見や姿に学び合う、学びのプロセスを醸成しようという姿勢が感じられた。

2. 勝山高校で育成する資質・能力を明確にする

1) 育成を目指す資質・能力について考える

2022年8月25日、勝山高校の探究室で堂森教諭（探究推進リーダー）、永野探究学習コーディネーター、水野の3人で1学期に行われた総合的な探究の時間の振り返りをした。

4月に新設された探究特進科の総合的な探究の時間の授業を参観することが中心であった。探究活動について探究の進め方、思考ツールを使った発想の方法などを学んだ後、課題の設定に取り組んできた。授業時には、担任、副担任、探究推進リーダー、学年主任の中から複数人が参加して生徒たちの活動を見守り、対話を通して指導助言を与えるなど手厚い指導が行われた。生徒は、安心して教員や同級生と対話し、思考を深めていく様子が見られた。

授業のデザインとその実践について4人で意見を交わした。課題の設定に際して、一般的な興味はあっても「特にこれといった疑問はない」、「どんな問いを立てていい

のかわからない」、「問いが適切なのか、問いに意味があるのか」と考えることに戸惑いを感じる生徒がいることが話題になった。その時有効なのが、教員が話をよく聞き、生徒の考えを深めていく支援であることを確認した。

教科の学習とちがい、総合的な探究の時間などで探究的な活動をするとき、生徒は「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」を具体的に明確に理解できている必要があるのではという話になった。

そもそも、探究活動により学校教育目標をどのように実現していくのか。そのつながりを話し合い始めた。勝山高校では9つのグラデュエーション・ポリシーとしてまとめられ、公表しているという。さらに、それらを実現するための指標を考えているということであった。

2) 生徒を見取るための評価基準を作成する

今回の学習指導要領の改訂の基本的な考え方の第一に、「育成を目指す資質能力の明確化」がある。

勝山高校は昭和23年の開校以来、「ま・こ・と」を校訓に掲げ、「豊かな人間性を養い、個性の確立をはかり、地域社会やグローバル社会の創り手となるために必要な資質・能力を育成する」という一貫した教育目標のもと「勝山市との協力や中高連携教育、産学官と連携したSDGsや学問的な関心に基づく探究的な学びを通して、自己の未来をデザインする力、本質を見極める力、他者と協働する力を育成し、生徒や保護者が希望する進路を実現する」ことをミッションとしている。

令和4年度から普通科に加え、「探究特進科」を新設するのを機に、生徒に育成する資質・能力を明確にするために全教職員で議論を重ねた。生徒・教職員、さらに保護者や地域の人々ともわかりやすく共有できるように9つにまとめられた。

<知識・技能>

- ① 幅広い知識と教養・技能を学び続ける力
- ② 観察や情報収集で地域・世界の課題を自分ごとにする力
- ③ 地域と世界から自己の将来像をデザインする力

<思考力・判断力・表現力>

- ④ ものごとに常に問いを向け、本質を見極める力
- ⑤ 新たな視点から創造的なアイデアを考え抜く力
- ⑥ 自己の考えを論理的・共感的に伝える力

<主体性・協働性・多様性>

- ⑦ 自立の精神をもち、既存の枠を越えていく力
- ⑧ 多様な考えを柔軟に受け入れ、協働する力

⑨ 未来志向で困難に立ち向かい、粘り強くやり抜く力

勝山高校の3年間の学校生活を通して「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)を明確にし、その実現を目指して「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階のつながりを踏まえた教育課程の編成)を整理し、「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)を計画し実践している。

これらの取組みを充実したものにするためには、学校全体として、生徒や学校、地域の実態を把握し、「何が身に付いたか」(学習評価の充実)を知り、学習の効果を最大化するためのカリキュラム・マネジメントに努めることが求められる。

9つの資質・能力が生徒の身に付いたかどうかを評価するために、評価基準を定めた。

「全員ができる状況」「卒業時の達成」「卒業時までには挑戦する」「エキスパートを目指す」の4段階に分け、三つの柱に沿って整理してきた。

たとえば、②については

c 全員ができる状況

- ・(家族や友だちなど)自分に近い範囲の問題に気づくことができる
- ・地域の課題に気づくことができる

b 卒業時の達成

- ・地域・世界の課題に対し、興味関心を持つことができる
- ・地域や世界の課題に対し、観察するために必要な情報を集めることができる

a 卒業時までには挑戦する

- ・自分自身の取組みと社会課題の接点を説明することができる
- ・課題解決に向けて自分の取組み内容を書いたり、述べたりすることができる
- ・地域や世界の課題に対し、自分の取組みが正しいことか振り返ることができる

s エキスパートを目指す

- ・地域や世界の課題に対し、自分の取組みを実行し続けることができる

と8つの評価基準を定めている。

9つの資質・能力ごとに定められ、全部で69の評価基準が作成された。

生徒にとっては、自己評価の観点としての意味がある。2年3、4組で6、7月に自己評価を試行してみたところ②についての結果が次のように出てきた。

cは、順に66%、65%とできたと考えている生徒が多い。

bは、順に47%、16%と減る。

aは、順に10%、6%、5%とまだまだである。

sは、0%であった。

生徒の学びの姿を表現した言葉遣いや配列などを、調査の結果を参考にして修正を加えた。探究科活動の実践と評価による振り返りを繰り返すことで、生徒は「何ができるようになったか」を追跡することが可能になったと考える。

3) 指導と評価を一体化させて資質・能力を育成する

教科や学校行事などを通して総合的に育成されると思われる資質・能力を一人ひとり評価していくことを考えたとき、時期を区切ってここまでこれができるようになるのと定めて、できているか否かを確認することは個別最適であろうか。成長の速度は人それぞれであり、苦手なことを意識するより、できたことを喜び、それが自分の得意につながることを望まれているように思う。勝山高校では、一人ひとりを大切にするという考えのもと、全員に「何ができるようになるか」を明確に示し、自分のペースで「何が身に付いたか」を振り返りながら高校生活を充実させることで主体的に取り組むシステムを構築している。

ラウンドテーブルを終えて、1、2年生全員(1年生109人、2年生105人)に自己評価させている。

②の「c 全員ができる状況」について考察すると、

- ・(家族や友だちなど)自分に近い範囲の問題に気づくことができる 1年生82%、2年生68%(以下同じ順)
- ・地域の課題に気づくことができる 44%、52%

これをどう読むかであるが、1年生は身近な問題を課題にする割合が多く、2年生は地域の課題に気づくことができる割合が増えたと、1年間の成長ととらえることができる。あくまでも、傾向であり、一人ひとりについては同じ身近な問題でもより深く考えた課題になっていることが予想される。そこは、担任などと評価票をもとに面談しながら、生徒の成長を教師と生徒の対話の中から発見していくことが重要になる。あくまでも対話を通して生徒支援を円滑に進められるように設計されている。

②の「a 卒業時までには挑戦する」について

- ・自分自身の取組みと社会課題の接点を説明することができる 1年生6人、2年生11人(以下同じ順)
- ・課題解決に向けて自分の取組み内容を書いたり、述べたりすることができる 8人、18人
- ・地域や世界の課題に対し、自分の取組みが正しいこ

とか振り返ることができる 5人、7人

卒業するまでに必ずできるようになることが望ましいが、早い段階から自分の取組みを自分で評価する、振り返ることができている生徒がいるとみることができる。振り返りの習慣は、教科や行事などいたるところで行われるが、地域や世界に貢献できているかも考えながら取り組む姿勢は大切なことだと最初から意識できるのではないかと思う。1年生の中にもできているというより、取り組んでいると考えている生徒が出てきていることを評価すべきではないかと考える。常に、意識しながら生活することは難しいかもしれないが、評価をする機会に思い出すことによって将来身に付くことが期待できる。

「主体的に学習に取り組む態度」を育成するための具体的な取組みであり、評価も一体となっている。文部科学省が「指導と評価の一体化」を進めているが、一つの方法ではないかと考える。

実際に、ラウンドテーブルに向けて「総合的な探究の時間」に指導してきたことがここで評価できる。

生徒に育成する資質・能力を「c 全員ができる状況」について取り出すと

⑥ 自己の考えを論理的・共感的に伝える力

- ・自分の考えを人に話すことができる
1年生 83% 2年生 73%
- ・自身の考えを文で表すことができる
1年生 75% 2年生 74%

⑧ 多様な考えを柔軟に受け入れ、協働する力

- ・人の話を聞こうとしている
1年生 91% 2年生 82%
- ・自他の考えの違いを認識している
1年生 80% 2年生 84%
- ・他者の思考に興味を持つことができる
1年生 76% 2年生 70%

⑤ 新たな視点から創造的なアイデアを考え抜く力について調べると

- ・他者の話に対し意思表示し、応えることができる
1年生 80% 2年生 77%
- ・受け身や従順ではない思考・行動ができる
1年生 59% 2年生 63%
- ・自身の気づきがあり、要点をメモすることができる
1年生 61% 2年生 59%

⑦ 自立の精神をもち、既存の枠を越えていく力

- 1年生 84% 2年生 74%

ラウンドテーブルを終えて、中間発表を行い、自分の課題設定について聞いてもらい、意見をもらうことで修正

するという「自分の言葉で話す 皆で話す」という目標がどのように達成されたかを評価することができたかを検討し、次回に向けてラウンドテーブルの実践を見直し、生徒たち自身の評価のスキルを向上させる参考にすることができるようになったと考えられる。

3. 自己評価の観点などについて振り返る

1) ラウンドテーブルで瞬発力を鍛える

水野：去年からいろいろ話をしていて中で中間発表をラウンドテーブル形式でやることについて、他の学校ではポスターセッションとかが多いですけど、勝山高校はホームページにも書いてあるように、対話をする中で子どもたちにいろんなことを気づかせることが大事だということを狙いとしていると思うのです。それについて、例えば子どもたちが自分でしゃべることによって色々気が付くことを重視しているのか、それとも周りの子どもたちから色んなアドバイスをもらえるということを重視しているのか、その辺のことをまず教えてほしいなど。

永野：一番の狙いとしては、自分以外のことを考えられること。いきなり来て知らない人の話だと全く分からないです、知らないですっていう話じゃなくて、目の前に現れた課題に対して考えていく、自分も一緒に考える、アイデアを出すというようなところが一番狙いたいと思っている事です。なので、意見をもらうことでもないし、発表することでもない。その場で素早く思考を展開させるということに多少なりとも慣れてほしい。企業で営業先に行ってある程度下調べをしても予期しない話とかいろいろ聞かれるんです。その場で答えられないと私達の行った価値はなくなってしまうんですね。持ち帰ってもじゃあ今度専門の人を連れてきますのでっていう話にすればいいと思うんですけど、営業職もある程度話できてそれで仕事を取ってきて、専門家である専門職の人間が現場に行くというのが基本的な流れなので、やはりどのタイミングにしても喋れないのはNGになる。

水野：そうか、そうか、なるほど。

永野：他の人の課題に対してどういうことなんだろうっていうふうを考えるということと、それに対して自分の答えはなんだろうなって。責任持たなくていいので。自分なりの意見をとりあえず出してみるという、チャレンジする機会を作る意味では、発表を聞く、なにか質問する、一緒に考える形にはなるのかと。

水野：そこが一番重視されるというふうになっているんですね。それで考えると堂森先生はラウンドテーブル

を大学院で経験しているので、どうしてもやってみたいになっていう気持ちがあったみたいなんです。その中で言っていたのは、子どもたち一人ひとりがファシリテートの能力と言いますか、今永野さんがおっしゃった、瞬発的な判断力で、問うとか一緒に考えるとかっていう力ってファシリテーション能力にすごく近いと思うんですけども、例えばそういう力をつけるっていうことを具体的に生徒に指導って言うと変ですけど、なんか促しているようなことはあるんですか。

永野：ファシリテーションって何か、というのは、1時間もうけてやりました。ただ、本来的なファシリテーターは意見を言わない場の取り回し役であって、スムーズに進行させる引き出し役である。でも、ここではそうじゃないんで。ファシリテーションっていう概念は知っていても、100%ファシリテーションじゃなくて、7割、6割ファシリぐらいでやってほしいなっていう言い方を2年生にしています。

水野：もう一つは、そうすると課題設定ってすごく大事なところになるんですけど、子どもたちがアドバイスを受けたとか、なんかこう視点を変えて少し考え方をえたりというような場面というのは、どういうところで一番子どもたちに対して支援するというような仕組みになっているとお考えなんですか。

永野：それに関しては、専門家である必要は全くない段階だと思っています。もっと深入りした時に、専門家の方々のお力をお借りしたいんですけど、課題設定なり焦点化の段階は、教員や周辺にいる大人たちを巻き込んで個別面談をするっていうレベル感で専門家である必要はない。むしろ、この子が何を言っているのかな、どうしたいのかなっていうのを整理してあげるっていう行為が大事。マーケティングのことを国語の先生が相手になったとしても、分かるように話を組み立てるといって十分だと思うんです。入り口段階なので、生徒同士のラウンドテーブルは、この意味でも機能する。近い時期に個別面談で、対先生、対大人というのも試みとしてはやっている。本来的には日常の中でやりたいんですけど、全体を監督していると誰一人深入りした話ができないっていうのが運営上どうしてもある。その後、構造はある程度できているので、ラウンドテーブルの2回目という段階ではある程度専門の方を入れたいなとは思っています。

水野：2回目のあたりは、ある程度課題が設定されて、探究し始めている途中ぐらいに、(生徒が)やり方を説明しながらアドバイスをもらうという形になってくる。

永野：そういう形にしていきたいな、と思います。

水野：なるほど、一応1年生は(2年の)7月くらいに最終の発表をして、その後2年生の間は同じテーマでやるのか、変えたりするのですか？

永野：変えないのが基本になっています。どの人にせよステップとしては、1年の7月くらいまではテーマを考えていない状態なんですけど、1学期末で何をしようか考え始め、ある程度気持ちが固まってきてこの先どうしていきたいのか考えたところでラウンドテーブル1回目、その後座学が多少進んでいる状態で、2回目のラウンドテーブルを2月に実施します。2年生は7月段階で中間発表、秋口に1年生と一緒にラウンドテーブル、学年末に再度ラウンドテーブルを行い、3年生の1学期に最終の報告という流れですね。

2) 自己評価の観点をもとに生徒と対話する

水野：先日いただいた資料(自己評価の観点)の話に行くんですけど、まずこれはグラデュエーション・ポリシーが9つあって、それに対して評価基準という言い方でいいのか、指標という言い方がいいのか。

永野：自己評価の観点です。

水野：これを与えるのは、生活全般についての評価なのか、あくまでも探究についての評価なのか。

永野：探究に限らず前者です。あくまでグラデュエーション・ポリシーから発しているのであって探究のポリシーではないです。

水野：ですよね。この間いただいた集計結果は、ラウンドテーブルの後ぐらいですか？

永野：直後、翌週ですね。ラウンドテーブルみたいな場で、多少なりアクションという状態になった時に自分が能動的に動いているかなとか、振り返りつつ答えるという状態です。なので、自己認識のレベルに影響を受けます。

水野：ラウンドテーブルの「話をする」とかっていうような部分について抽出してみたんですけど、今おっしゃったように1年生の方が自己評価が高くて、2年生になってくると自己評価が低くなっていく。これって、ある程度自己が見えてくるので、自分のやっていた行動、アクションがまだ評価するには低いんじゃないかなっていうふうに、2年になると逆に分かっていくから低くなるというふうに考えればいいですかね。

永野：いわゆるダニングクルーガー効果という、自己理解のレベルが上がるほど自己評価が低くなっていくという現象そのものだと思っています。

水野：つまり自分が主体的になればなるほどその評価は割と厳しくなってくるというふうな思っていて、さら

にそれを乗り越えて3年の卒業あたりぐらいにはちゃんとまたしっかりした評価ができるようになるという感じですかね。

永野：それが一番きれいなストーリーだなと思っていますけど。それって本当にちゃんと上がるのって社会人4年目ぐらいじゃないかなと、いろいろな世代と付き合いってきた中で思います。だから、20代後半にならないと、本当の意味でのこの自己評価にはたどり着かないとは思いますが。ただ、この高校っていう枠組みの中でカーブを描くと多分そうだし、大学も、新卒で就職した時も同様であるかと。その後の中間世代になってくると、別にそういうことじゃなく仕事が回ってくるというような自己評価じゃなく、自己評価に合った仕事を選んでいくっていうラインに入る。こういうことで浮き沈みじゃなくて、自分が最大限生きる場所なり、役割を選んでいくっていう、あるいはそれが与えられてくるっていうことになると思います。

水野：僕が教育の現場にいると、例えば小学校の6年生って自分たちで例えば運動会をするにしても立派なことができるんだけど、それが中学校に入って1年生になると何にもできないっていうか、やっぱり3年生がいて、それに従うだけになってしまうっていうようなところで一旦落ちるっていうような感じのことと似ているのかなと思いつつ聞いていたんですけど。

永野：小学校の先生の話を知ると、5、6年生って有能なんだって思っちゃうんですけど、それって自分に対する自信がその環境内で最大限発揮しているから最大のパフォーマンスを生んでくれるのだと思うと、その自己認識がやっぱり環境内でのバランスで絶対ついてきますよね。

水野：僕は自分で自分のことを客観的に評価できるっていう力っていうのがすごく大事だと思っていて、それは言葉で伝わらないのかもしれないんですが、ある程度そういう意識をさせるためには、こういう結果が出た後に先生との個人面談と言いますか、その中で育まれていくようなものかなというふうに思っているんですけど。その辺の永野さんはどういうふうに考えているんですか。

永野：どこまで皆さんがそういうふうに使ってこなしてくれるかは別として、これは評価のツールではなくて、これをもとに話し合うためのものなんだよっていう言い方をしています。君本当にこれできている？どこできていると思っているの？っていう言い方もあれば、君はこれはクリアしているよ、っていう言い方の両面あると思うんですけど。そこで自分の客観と主観の調整がだんだん

ついてくると思います。私は1000人以上いる企業にいたので、従業員の評価ってこういうふうにする必要があるんですよ。こういうルーブリックが用意されていて、ここまで行ったからあなたはこの職級なんだよ、あるいはこの待遇なんだよ、と。ここを乗り越えれば次のステップに進めるっていう段階まで来ているわけだよ、っていう。人事評価の観点と部署内のスキルセットのバランスで、あとは人物像を見て、役割が会社内で決まってくるっていうところでそれを上司と話して「私これできていますから」っていう主張と、客観的に考えると、「君はまだまだだよ」とか。チャレンジ目標なり、基準に対して物事をやっているっていう、あくまでも客観的仕組みになっていました。

水野：それを高校でやることによって生徒個人が客観的に自分を見つめるっていうメタ認知の非認知的能力について育てていくっていうような仕組みですね。

永野：それが機能し始めたところなのかなと。あとはこれを使って面談さえすれば。全部に対してコメントしていたら1時間以上かかるので、主要なところだけだと思いますけど。「どこでそう思っているの」って話は絶対あると思いますし、「多分君はこういうところできてるよ。だから、そのくらいの基準で次、丸つけてみな」とか。

3) ビジョンを明確にし、共有する

勝山高校ではビジョンを明確にしたことで、基本的な目的は何で、探究に照準を合わせることを生徒、教職員、保護者が共有できていると考える。

取組みや振り返りの話し合いの中から、今回の学習指導要領が改善すべき6つの事項として示した枠組みができあがったように思われる。すなわち、「何ができるようになるか」を共有し、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を明確にし、「子供一人一人の発達をどのように支援するか」も語られ、「何が身に付いたか」「実施するために何が必要か」を具体化している。探究を中心として考えることでカリキュラム全体をデザインしていると考えられる。

IV. 戦略的に考え、行動する

1. 戦略的に考え、行動する必要に迫られている

高校では、これまでの「総合的な学習の時間」を、今回の改訂で「総合的な探究の時間」に名称を変更して2年が過ぎようとしている。主な目的は、探究を高度化し、自律

的な活動にすること、生徒が自ら学びを調整し、「主体的・対話的で深い学び」にすることである。

課題と生徒の関係について、「総合的な学習の時間」の「課題を設定し、解決していくことで、自己の生き方を考えていく」ことから、「総合的な探究の時間」の「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく」（「解説」 p 9）に変更するとも示されている。

各高校では、探究が高度化し、自律的に行われるように授業改善が進められている。生徒のみならず、教師も探究する学び合いが始まっている。このとき、学校が組織として「学習する組織」、「目的に向けて効果的に行動するために集団としての意識と能力を継続的に高め、伸ばし続ける組織」（『学習する組織』入門 p 26）になることが必要ではないか、すでに学校で実践されていることを意識化することが重要ではないかと考える。「学習する組織」では、「学習する組織を構築するうえで、戦略的に考え、行動すること」（『学習する組織』 p 407）が必要なのだと指摘している。

2. 戦略的に考える

「学習する組織」において、「戦略的に考える」とは、「基本的な目的は何で、照準をどこに合わせるべきか」を明確にすることであると説明している。

高校では、昨年度からスクール・ポリシーとしてこれらこのことを公表することが義務付けられた。背景としては、『新しい時代の高等学校教育の在り方 ワーキンググループ（審議まとめ） ～多様な生徒が社会とつながり、学ぶ意欲が育まれる魅力ある高等学校の実現に向けて～（令和2年11月13日）』は、各高校で効果的な教育活動が進められるために次の提言を行った。「学校ないし学科・課程全体として統一感のある一貫した方針について各教職員が共通認識を持ち、そうした方針の下で個々の教師の創意工夫を生かした指導が行われることが望まれる。」（p 19）と方向性を示した。さらに、教育活動の継続性を担保するために「①育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）、②教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）、③入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー）の3つのポリシー（以下「スクール・ポリシー」と総称する）を全ての高等学校において策定・公表し、特色・魅力ある教育の実現に向けた整合性のある指針とする必要がある。」（p 19）とした。

『新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正について（令和3年4月21日）』により、高等学校にお

ける「三つの方針」（スクール・ポリシー）の策定・公表が義務付けられた。

各高校は、趣旨を生かしながら策定してきた。勝山高校のグラデュエーション・ポリシーはその一例であり、「基本的な目的が何か」が明確になっていると思われる。

では、照準をどこに合わせるか、焦点化するに際して、「総合的な探究の時間は、生徒が探究の見方・考え方を働かせながら横断的・総合的な学習に取り組むことにより、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成するものであり、変化の激しい社会においてますます重要な役割を果たす。そのためには、総合的な探究の時間を教育課程の中核に据えて、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントを確立することが大切である。」と「総合的な探究の時間」に焦点を当てることが重要であると述べている。

今回紹介した二つの高校では、探究に関連した学科を新設するなど枠組みを見直している。グラデュエーション・ポリシーやカリキュラムの策定においても探究を中核に据え、教職員が話し合いを繰り返し、そのビジョンを共有することにより戦略的に考えていると推察する。

3. 戦略の構造のもと深い学習サイクルを広める

1) 「戦略の構造」を整える

高校では、「学習指導要領」で求められた「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すために、それぞれの学校のミッションを再定義し、学校教育目標、スクール・ポリシーを具体的に明確化することで、ビジョンを教職員、生徒、保護者や地域社会と共有することに努めている。そして、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にし、社会との連携および協働によりその実現を図っていくことを周知させることで組織としての方向性を確立することでどのように実践していくかという「基本理念」を策定している。

「学習する組織」では、「基本理念」、「理論・ツール・手法」、「インフラのイノベーション」の三つの要素からなる「戦略の構造」を構築することが「戦略的に考え、行動する」ための学習環境として必要であると考えている。

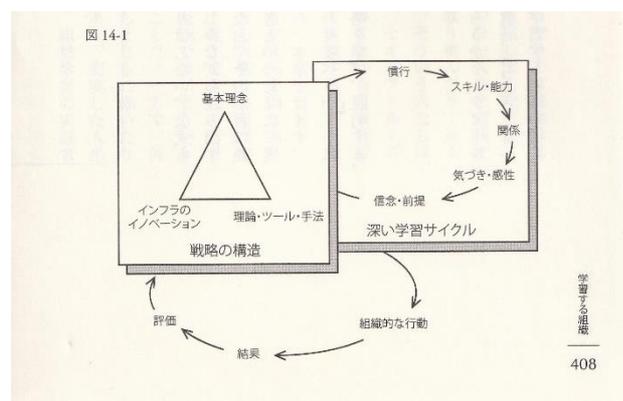
「理論・ツール・手法」とは、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にし、効果的に実践できるように職員会議や集会などで繰り返し確認したり、研修を計画したりすることだと考えられる。

「インフラのイノベーション」は、「ひと・もの・かね」といわれているものに相当する。

人事に関して、分掌や学年会などの役割に応じて適切に配置することや、異動に関することも含まれると思う。

学校の環境を整えること。そのための、資金のやりくりが考えられる。

3つの要素からなる「戦略の構造」(図14-1の左側)「学習する組織」(p408)を構築できたことになる。ここで考察してきたことは、学校組織マネジメントとしてこれまででも求められていたし、それぞれが実践してきたことである。



2) 「深い学習サイクル」を学校に広める

「戦略の構造」のもと行動に移す、学校では目的や目標を実現するために教育実践、授業改善などに努めることになる。このとき、「学習する組織」によれば「深い学習サイクル」の実践を広めることが重要であるとされる。

「深い学習サイクル」(図14-1の右側)は、「信念・前提」「慣行」「スキル・能力」「関係」「気づき・感性」という5つの要素をつないだサイクルである。

「信念・前提」からスタートすると、伝統的な教育観、教育制度を単体として捉え、一部の選ばれた人によって意思決定がされるもの。生徒を聞き手とし、教師中心で確実に知識・技能を身に付けさせ、標準化されたテストを中心に評価する。生徒の直線的な発達を前提にした標準化されたカリキュラムを実践し、説明責任を果たすといった常識や前提がある。それとは対極をなすようなニュー・ノーマル(新常态)の教育が常識となる動きが芽生えつつあると、「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 -エージェンシー、資質・能力とカリキュラム-」は現状を分析している。

こうした状況の中で、今回の改訂を受け、今見てきたような「戦略の構造」が構築され、共有されている。それにより、生徒主体で資質・能力を育成する教育、「主体的・

対話的で深い学び」を実現するよう取り組んでいる。

これまでの教育観や授業スタイルを改変・改善することに取り組んでいる場合もあれば、これまでの「慣行」に囚われて従来の教育観に従って行動している場合もある。

実践をしながら学びを改善する取組みを協働したり、振り返りを共有したりすることで新たな「スキル・能力」を獲得していくことが望まれている。

たとえば、「総合的な学習の時間」を中心に教育課程を編成し、授業をデザインし、どのようにすれば生徒が自律的で、高度な探究的な学びが実現するかを、対話を通して学び合うことで、生徒の探究のスキルや能力を育成することに取り組んでいる。この実践を通して教師自身も探究的な授業や主体的・対話的で深い学びについてのスキルや能力を獲得することが可能になる。

こうした取組みを推進する中で、探究を中核として進める新しい学びのコミュニティが生まれ、分掌や教科の中のコミュニティが変化したりすることで学校内の「関係」のネットワークにも変化が起こってくる。

このように、見通し、行動し、振り返るという学びを繰り返し実践することで、「気づき」が起こり、「感性」にも影響を与える。

これによって「信念・前提」の変化や修正が起こり、サイクルが回ることになる。その結果、出現しつつある文化を強化することも起こりうる。

ただし、「慣行」のところで見たように、これまでの「慣行」から新しい「慣行」に移行できる場合とできない場合が生じる。学校の中でその割合により好循環に向かうか、逆の悪循環に陥るかが決まってくる。システム思考の中心的な原則、「構造が挙動に影響を及ぼす」に従えば、「戦略の構造」、中でも三角形の頂点にある「基本理念」を明確にし、ビジョンを共有することに成功すれば、ふだんの教育実践に影響を与え、「慣行」にも影響を与えることができるようになると思う。そのためにも、「深い学習サイクル」について振り返りの機会を設け、「戦略の構造」が影響を及ぼしやすくすることが大切であると考えられる。

3) カリキュラム・マネジメントで改善を持続する

カリキュラム・マネジメントの充実について、「各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組

織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。」（「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編」p45）と定めている。

図14-1の下側のシングル・ループが「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく」ことを表している。学校評価や分掌ごとに振り返りを行うことでカリキュラム・マネジメントが実践されている。

学校が組織として学びを深めていくために、自分たち自身のバイアスに気づき、それを取り除くことが必要である。そのため、前提そのものを検証し、ありのままの現実を見ることで自らの「信念・前提」をみつめ、現実の状況に立脚した、より適切な前提を再構築する「深い学習サイクル」による学びが求められる。この2つめのループによる学習がダブル・ループ学習である。カリキュラム・マネジメントを充実させるためには2つのループによる学びが大切で、継続していくことで教育活動の質の向上を持続的に図っていくことができると確信している。

探究コーディネーターを受けるにあたり、探究活動を推進している先生方と振り返りをする中で、特に「深い学習サイクル」での学びを支援することができるのではないかと考えた。今回、振り返り時の対話の一部を記録することで、自分自身の振り返りを行い、客観的な指導・助言を受けることができれば幸いであると考えている。

VI. おわりに

生徒と教師の学びは相似であるといわれている。探究はプロセスが大切であるともいわれている。

「総合的な探究の時間」の授業で発表を見せていただくとか、第1回「高校生探究フォーラム」に参加させていただき、探究の成果を実感している。

探究コーディネーターとしていくつかの高校で探究を中心的に推進している先生方と接している中で、先生方の「総合的な探究の時間」を運営・実践するプロセスに触れ、記録に残したいと思うようになった。

探究に対する先生方の思いや背景について対話を通して振り返った。AIが拾いきれないような相槌やツッコミや笑いで感じられる安心でなごやかな雰囲気の中で話を進めている様子や、声のトーンや間も文字では伝えきれないのが残念だ。少しでもその場の雰囲気を感じていただこうと話されている通りに文字にしたことでかえって読みにくくなった部分もあることをお詫びしたい。

関係の学校、先生方に感謝申し上げます。

[参考文献]

エティエンヌ・ウエンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー著（2002）

「コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践」 翔泳社

ピーター・M・センゲ著（2011）

「学習する組織 システム思考で未来を創造する」 英治出版

ピーター・M・センゲ著（2014）

「学習する学校 子ども・教員・地域で未来の学びを創造する」 英治出版

小田理一郎著（2017）

「『学習する組織』入門 自分・チーム・会社が変わる持続的成長の技術と実践」 英治出版

デボラ・マイヤー（2011）

「学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦」 岩波書店

白井俊著（2020）

「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来—エージェンシー、資質・能力とカリキュラム—」

ミネルヴァ書房

木岡一明編著（2007）

「ステップ・アップ 学校組織マネジメント—学校・教職員がもっと元気になる開発プログラム—」[電子版] 第一法規出

奈須正裕著（2021）

「個別最適な学びと協働的な学び」[電子版]

東洋館出版社